研究室だより

人間環境科学科
環境社会学研究室

井上　真

■ゼミの概要

早大・井上真ゼミは、環境社会学の教育・研究の場として2015年４月に始動した。その時のメンバーは、専門ゼミの学部３年生２名と客員教員であった私の３名だった。2017年３月に彼ら２名が１期生として卒業し、同年４月より私が人間科学学術院の正規教員として正式に任用された。現在の学部４年生はゼミの４期生となる。

2019年７月現在、ゼミの人員は、学部３年生８名、学部４年生９名、修士課程学生３名、博士課程学生２名、招聘研究員ほか10名で、私を含め33名となった。大学院ゼミでは大学院学生と招聘研究員等による活発な議論が交わされ充実度が増してきた。学部３年生の専門ゼミと４年生の卒研ゼミでは、発表者に対して議論を挑む討論者を決め発言を義務づけている。ゼミに対する私のモットーは「楽しく！ 厳しく！ 温かく！」である（https://inouesemi-waseda.jimdo.com）。

■環境社会学の特徴―ガラパゴス化しない専門性

環境社会学は、社会学を中心としつつ関連する学問を包含する学際的な研究分野である。一般的に学問の世界では、新しい学問分野ができた当初はワクワクする研究が目を引くが、洗練されてゆくにしたがい重箱の隅をつつく研究が増えてくる。何故そうなるのか。それぞれの学問には作法がある。学問的な方法論があってこそ、学問は成り立つ。だからこそ、新しい学問分野が創成されたあと、次第に方法論が精錬され、それとともにその学問分野の外枠が形成され、外部の世界と明確な境界線が引かれるようになる。その後は、外部から隔絶された内輪での最適化・精緻化が進行する。その結果、外部との互換性を失い孤立して取り残され、あらゆる越境の試みは拒絶・排除され、ダイナミックな現実社会にとっての意義は失われてゆく。これが学問分野の「ガラパゴス化」の進展であり、当該学問の「脳死」を導く原因である。

学問の「脳死」を判定する基準もある。第１は、排除の言動が目立つようになること。新しい学問であれば「それも○○学」と貪欲に領域を拡大するが、脳死寸前の学問では「それは○○学ではない」という言動が学会などで目立つようになる。第２は学史が目立つようになること。プロスペクト（展望）よりもレトロスペクト（回顧）が多くなるのは健全ではない。第３は出自の多様性が小さくなること。ある大学の教員が自分の所の卒業生で占められるようになると、全体としての考え方の柔軟性が低下する。

学問分野によってはこのような「ガラパゴス化」がむしろ学問を活性化さるケースもあろう。しかし、環境問題に関わる学問分野では、「ガラパゴス化」は致命的であり「脳死」へと直結する。常に現実社会との切り結びから刺激を受け、自分なりに関連する諸学問分野で提案されてきた概念や枠組みを取捨選択し、時には独自のアプローチを創成して問題に挑むことが求められる。環境社会学にはこのような意味での専門性が求められるというのが私の理解である。

一般的に、専門性の習得は、その分野に特有の現状認識の仕方、問題の立て方、情報収集の技法、そして考察（分析、説明、解釈）のやり方を身につけることである。このような習得プロセスで専門家は「つくられる」のである。ところが、専門性を身につけることと思考の硬直化(＝「専門マシーン」化)は同時並行的に進展する傾向がある。そして、「専門マシーン」は社会常識からかけ離れた判断をおこなうことがある。マスメディアを賑わした「＊＊＊ムラ」と呼ばれる専門家集団は、この国で生活している一人の人間(＝生活者)の視角からすると特異な存在であった。それを避けるためには、専門性を向上させつつも「専門マシーン」になることなく、柔軟な思考を維持することが重要であり、そのためには市民的感覚を常に保持していることが必須となる。市民的感覚を保持したうえでの専門性・・・・・環境社会学はそれを習得しやすい性質を有している学問であるといえる。

■市民性を重視した教育

学部学生に期待するのは「市民」としての成熟である。まずは、現代社会が抱える様々な問題を感じるセンサーを身につける。センサーがなければそもそも問題を認知することさえできない。そして、感じとった問題に関連する情報を収集し、自分の頭で考え、暫定的な答えを出し、そして行動に移すことができる「市民」に育って欲しい。講義やゼミはそのためのきっかけに過ぎないが、真剣に取り組むならば、初歩的な専門性を身につけた「市民」として大学から巣立ってゆくことができるであろう。この考え方はディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに矛盾しない。就職してゆく学生にとって、環境社会学を勉強したことよりも、このような「市民性」を身につけたことの方

がずっと重要なのだ。「環境社会学」はそのための手段として重要な役割を果たすことができる学問として位置づけることができる。

修士課程の学生は、「市民性」の醸成を前提としたうえで、環境社会学の専門性を身につけてもらうことになる。関連する諸分野を含む環境社会学の特性からすると、カリキュラム上、自分が修士論文で扱う問題群に関連する講義を十分に履修できるのは幸運である。人間科学研究科には、ガラパゴス化せず広い視野を持つ「市民性」によって「専門マシーン」化を回避する教育の仕組みがカリキュラムとして整備されている。あとは、学生自身の自覚次第ということになる。

博士課程の学生になると、今度は「専門性」で勝負することになる。ただし、ここでいう「専門性」は、やはりガラパゴス化しない専門性であり、特定分野に閉じこもらない専門性（論文自体は特定の分野に位置づけられたとしても学際的な展開可能性を有する専門性）であり、アカデミズム内部に自閉しない専門性(学問と実践をつなぐ超学際)である。学位論文を仕上げた後は、複数の学問分野の公募に応募することが可能となり、就職にも有利に作用する(はずである・・)。

■年間行事

ゼミの年間行事は次に示すとおりである。

- ４月―オリエンテーション、懇親会。
- ５月―農業実習合宿（１泊２日）：田んぼアートの田植え作業など。協力：NPO法人古瀬の自然と文化を守る会（茨城県つくばみらい市）。
- ６月―山村合宿（１泊２日）：全校児童数20名ほどの小学校を訪問。協力：NPO法人日本上流文化圏研究所および早川南小学校（山梨県早川町）。
- ７月―暑気払い：春学期ゼミ打ち上げの懇親会。
- 10月―農業実習（日帰り）：５月に植えた田んぼの稲刈り，新米炊き出しなど。
- 10月―まこカフェ（井上ゼミ関係者の集い：講演会＋懇親会）。
- 11月―環境社会学ゼミ首都圏インカレ報告会：６大学の４年生による卒業研究中間発表と質疑応答。
- 12月―忘年会。
- ２月―卒研発表会：開発人類学研究室（原知章先生）と歴史人類学研究室（里見龍樹先生）と合同で開催。
- ２月―送別会。

■おわりに

博士課程学生の研究指導の一環として原知章先生と合同ゼミ（研究報告会）を毎年複数回実施している。学生のアプローチは人類学、民俗学、社会学、観光学、地域研究と様々であるが、相互に隣接分野であるため、議論の内容は互いに影響し合わない「サラダボール」ではなく、むしろ相互が融けあう「フュージョン」の様相を示している。今後の展開が楽しみである。また、教員同士の共同研究をできる範囲で、かつ着実に進めてゆきたいと思っている。

ゼミ合宿（茨城県つくばみらい市での田んぼアートの田植え作業、2019年５月）

ゼミ合宿（山梨県早川南小学校でのプール掃除、2019年６月）